
太陽の王子 月の姫

ヒビキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の王子 月の姫

【Nコード】

N0242D

【作者名】

ヒビキ

【あらすじ】

わたし、テイセラ。一応ここ、アストレイア王国の姫よ。訳あって、私は夜、双子の弟カイトが昼しか存在できないという不便な体なのよねー。そんな中、親善大使として隣国フォルツアーノから王子様がやってくるようになって・・・

第1話

「テイセラ ツ！」

夜空には蒼月アルカーシャが、波の音すら聞こえてきそうな程に近くに見える。その脇には常に、アルカーシャの半分くらいの大きさの紅月ヴェルジュが炎を纏い鎮座している。二つの月の光が交わり、淡紫のヴェールに私たちは包まれている。

「テイセラ ツ！」

この淡紫の光を浴びて、人は魔力を得る。もちろん魔力を得たとしても、扱えるかどうかは個人の資質次第だから、誰もが術師になれる訳ではない。ここアストレイア王国は魔法王国と通称されるくらいだから、他国に比べると圧倒的に魔法技術の研究は進んでいるし、術士の人口も多いのだけだ。

「テイセラッ！！聞いておるのかッ!？」

バンッ、と机を叩いてこっちを睨みつけているのは、おとーさま。おとーさまの肩書きは、アストレイア王国の国王だ。そういうわけで、私 名前はさつきからおとーさまが連呼するようにテイセラッっていうんだけど、この国の王女ってことになる。年は14だけど、魔法の資質が高いのを認められて大学に籍を置いている。今着ているのも大学の制服で、紺色のカラーのついた膝丈まである上着と、そこから覗くくらいの長さのプリーツスカート。術士としてのランクごとにタイの色が分けられていて、私は3等級にあたる桜色のタイを胸元でリボンのように結んでいる。いかにもお姫様っていうドレスは動きづらいし、大抵はこの格好だ。

そういえば私はおとーさまに執務室へ呼ばれていたんだっけ。

「うっさいなあ、もう。話って何よ。」

「なな何だその言葉遣いは！何度も言うようだがおまえにはアストレイアの姫としての自覚が足らんだ！！姫ともあるうものが・・・」

ひらり、と白い蝶の群れが舞うようだった。机の上に整然と置かれていた書類の山が、叩かれた衝撃で空を舞っていた。

「無銭飲食だの、公共物の破壊だの一体どういうことだあ!!!」

・・・白い蝶は請求書の山だったようだ。

「そんな細かいこと気にしてるから、その年でヅラなのよ。」

「誰のせいだと思ってるんじゃないあ!!!」

おとーさまのヅラが、ずるりとズレた。側に控えていた大臣'sの顔に縦線が入る。

ヅラという真実をひた隠しにしているおとーさまは、青くなったり、赤くなったり、夜空に浮かぶ二つの月のよう。魔力はまったく感じないけど。

即座にヅラの位置をなおすおとーさまだったが、大臣's皆知ってるから。

「どうしておまえはそうなんだ。カイトはあんなにもいい子なのに。」

あ、泣いちゃった。ちなみにカイトってのは私の双子の弟だ。二言目にはカイトカイトって、正直ウザイ。

「明日はフォルツアーノ王国から親善大使としてジャスティン王子がいらっしゃるといのに・・・もうわが国は　お　し　ま　い　だ　ア　ア　ア　・　・　・　。」

「っていうかあ、そんなにカイトがいいんならジャスティン王子のお相手はカイトがすればいいーんじゃないん？」

フォルツアーノってのはアストレイアの近隣では一番の大国家。うちみたいな弱小国家なら、ぜひともお友達になっておきたいんだろう。アストレイアなんて田舎で古くさい魔法王国と違って、フォルツアーノは最先端の科学技術を誇っている。首都グランティシアでは、空に

船が浮かび、夜も光に溢れた眠らずの都市として有名だ。そしてなんといつてもカジノ！カジノがあるのだよ!!!いいなあ、行ってみたいなあ・・・

「カイトがいれば勿論無論当然のようにそうしておるわ！だがな、親善のためのパーティーは『夜』行われるのだ！！おまえが出るしかなかるう！？」

「えー、めんどくさ・・・」

カイトはパーティーの時間には出てこれない。明日の夜、用事ではないとかそういうことじゃなくて、『夜』彼は存在することができない。逆に私は『昼』存在できない。どういうことかって？詳しく説明するともものすごく長い話になるんだけど、まっ、簡単に言えば私たち呪われちゃってるのよねー。私とカイトは二人で一つの時間を共有。昼はカイト、夜は私、入れ替わることでこの世界に存在しているのだ。

「テイセラよ、頼むから問題を起こすでないぞ。もうおまえは何もなくていい。何も喋らずただニコニコしておればいいわ。頼むから、それ以外のことはしないでくれ・・・」

そんなこと言われても、そっちのが疲れるじゃん？と反論しようとして、私はすっごくいいことをおもいついてにんまりと笑った。

「おっけ。いーわよ、おとーさまの言うとおりにするわ。そっか・わ・り！言うこときくから、今度グランティシアに遊びに連れてってよね。いいでしょ？」

「うぬう・・・」

おとーさまは口ごもった。よっしゃ、あと一息でこれは落とせると見た！

「テイセ、夜しか出てこれなくて、ホントは寂しいの。おとーさまがカジ・・・いえ、グランティシアに連れて行ってくれたら、テイセ、うれしい」

ちょっと上目遣いにうるんだ瞳でおとーさまを見る。大臣'sが青ざめてわたわたと首や手を振り、陛下ダメです、と口をパクパクさせる。ちッ、邪魔すんじゃない、大臣'sごときが。

おとーさまは咳払いを一つすると、周囲を見渡した。

「わかった。約束しよう。テイセラ、だが、いいな？ちよっつと

でも口を開いたり一歩でも動いたりしたら、この約束はナシだ。」
やった！

大臣'sがへなへなと膝から崩れ落ちた。心なしか縦線がさつき
よりずっしり重そうだ。

しかしそんなことはどうでもいい。夢にまで見たカジノへもうす
ぐ行くことができるんだ！

ひらりひらりと柔らかな光を翻すドレス。白の紗が幾重にもふわ
ふわと重ねられたそれは、真珠とレースで造られた薔薇があしらわ
れている。腰まで届く金の髪を結び上げ、ドレスと同じ白の生花を
挿した私は、・・・はつきりいつて悪趣味にもほどがあるわよね。

それにしても退屈だナー・・・

おとーさまと約束をした次の日の夜、予定通りにフォルツアーノ
からの親善の使者達は到着した。形式通りに両国間での挨拶がなさ
れ、現在は歓待のパーティーの真っ最中である。

動くな喋るな飲み食いするなとうるさいおとーさまの言いつけを
私は大人しく守っている。約束を反故にされたくないからねっ。し
かしそんなしおらしい私のことを誰も信用していないのか、私の周
りは大臣'sや果ては騎士団員達を取り巻いている。そして私が何
かしてかさないかどうか神経を張り詰めて見張っているのだ。こい
つら、あとで覚えとけよ・・・

でもまあ、傍目にはお姫様と護衛騎士を演出できているかもね。

私はくるりと辺りを見渡した。

おとーさまはジャスティン王子と歓談しているようだ。私もジャ
スティン王子を見るのは初めてだけど、フォルツアーノの人らしく
漆黒の艶やかな髪で、涼やかな瞳の色も同じく黒。かなりの長身で、
立ち振る舞いもも大国家の王子らしく威風堂々としている。年は1
9と聞いているから私より5つ年上ということになる。こりゃ周囲
の貴族令嬢達がきゃあきゃああと騒ぐのも仕方ない。ま、私の趣味じ

やないけどね。

そんなことを考えながらジャスティン王子を観察していると、ふつと振り仰いだ当の本人とぼっちり目が合ってしまった。

げ・・・

じろじろと観察されてたと知ったら気持ちのいいものではないだろう。私は取り繕うようにジャスティン王子に作り笑いをしてみた。だがしかし、向こうはその笑いには応えてくれず、私のことを真っ直ぐに睨みつけてくる。そしてつかつかと私のもとへ向かって歩き始めたではないか！

うぬう・・・

これは・・・逃げるべきか、それとも戦うべきなのか？

周囲の人達は凍りついたように動けない。

「じゃ・・・じゃすてん殿・・・ふごがっ」

おとーさまはジャスティン王子をあたふたと追いかけてようとして、けつまずいて転んだ。ツラが悲しいほどに勢いよく飛ぶ。

私がどう対応するか考えがまとまらないうちにジャスティン王子は私の前に立ちほだかる。身長差がかなりあるためその圧迫感に私は一瞬たじろいだ。

「も・・・もう駄目だ・・・」

「アストレイアはオワリだ・・・あはははは八八八」

大臣'sが壊れた。ジャスティン王子はそれを気に留めた様子もなく、私から視線を外さない。そして、口を開いた第一声が。

「か・・・可憐だ・・・」

「はあ？」

何、言っただコイツ？

「アストレイアのティセラ王女であられるとお見受けした。月夜にしかその姿を現さぬ深窓の姫君という噂は聞いてはいたが・・・」

そらまあ、私が出てこれるのは夜だけだもんなあ。でも、他国でそんな噂になってるなんてねー。

「まるで妖精さん・・・おお、噂は真であった・・・いや、噂以上

だ・・・雪のように白い肌、湖のように深い瞳・・・」

ジャスティン王子の端正なお顔から、あろうことか鼻血がぱたぱたと流れ落ちた。フォルツアーノのジャスティン王子といえば武芸に秀で、学問にも明るい聡明なお人という噂を聞いたことがあるけど、あんたこそ噂以上だよ・・・

私はこの変な王子様からどうにか逃げようと、愛想笑いを浮かべたままじりじりと後ずさった。しかし、ジャスティン王子はすつと片膝をつき、私の手をとって、こう言った。

「テイセラ王女、わたしと結婚してください！」

「へ？」

父上は何を言ってるのだろうか？僕は思わず間の抜けた声を出してしまった。

「こんな日が来ようとは・・・なんとという幸運！！アストレイアの未来は明るいぞ、そう思わんか？カイトよ！」

「思いません。いいですか？父上。姉上がフォルツアーノの王子に求婚されたのは理解しました。ですが何故それを受ける気満々でいるんですか！！昼は僕なんですよ！！？」

「おまえなら何とかできるだろう、ワシは信じておるぞ！」

「息子を嫁にやる父親がどこの世界にいるんだああッ！！！！！」

僕はバンと机を叩いた。ダメだ、父上は聞いちゃいない。この振って沸いた縁談に終始ニコニコとしている。

たしかに僕と姉上は瓜二つと言われるくらい容姿も声も似ている。姉上の姿を例の事情から僕は10年程見てはいないが、誰もが声をそろえてそう言うのだから余程似ているのだろう。

「っていつか、むしろカイト様のほうが美少女・・・」

「なにせ守つてあげたい姫君No.1の座にここ数年君臨しているのはカイト様ですからなあ・・・」

うんうんと頷きあう大臣達。ダメだこの国終わってる。僕ももう

終わ・・・

いや！自分の道は自分で切り開くしかない！僕は独り立ち上がった。このまま状況に流されていては、ありえないことに僕は男と結婚することになってしまう。今までも姉上の起こしたとんでもない騒動に巻き込まれたことは多々あるが、今回のこの件だけは何とかしてでも阻止せねば・・・！

しかしどうするべきだろう？父上はこの様子だから全くあてにはできない。姉上の縁談に弟である僕が割り込んで破談にするというのも、この次第によっては両国間の親善関係を崩してしまう可能性もあるだろうし、姉上自身が断るといっても同様だろう。となると、残された手段はジャスティン王子のほうから前言撤回してもらうしかない。そこまで考えてはたと僕の思考回路は止まった。

・・・姉上は、ジャスティン王子のことをどう思っているのだろうか？

話によると、ジャスティン王子は聡明で明朗闊達な人柄で、容姿も申し分なく非の打ち所がないという。だから、もしかしたら・・・姉上もジャスティン王子のことを・・・そうしたら僕が二人のことを引き裂いていいわけがない。姉上が悲しむ姿を想像して僕は、微妙に複雑な気持ちにさせられた。ここは、姉上の心を知っておく必要があるだろう。

「ファム、いるんだろう？どこにいる？」

「カイト様、お呼びですかあ？」

ふわっと燐光を散らして現れたのはファムは、姉上が契約召喚したのであろう妖精で、姿形こそ人と変わらないが掌に収まる程度の大きさしかない。全身がやや透けて光を帯びており、鳥の翼にも似た6枚羽でふわふわと優雅に僕の目の前に浮かんでいる。僕は姉上と違い、魔法に関する資質を持たない為詳しいことは判らないが、彼女は僕と姉上にしか視認できず、会うことのできない僕たちの間のホットライン役とでも言うべき存在だ。

ファムは眠たそうに大きな伸びをする。

「うう、テイセに付き合ってたら毎晩遅いんですよ。お肌に悪いのです……」

……精霊体の彼女の肌がどう荒れるというのだろう。それはさておき、僕は早速本題に入る。

「昨日の夜の話は父上から聞いている。姉上はジャスティン王子との縁談をどうお考えなのだろうか？」

「ジャスティン王子ならファムもこっそり見ましたよう。とっても素敵なかたでしたのです」

「いやだから、ファムの感想ではなく姉上のお考えをだな……」

何故だろう、僕の周りには人の話を聞かない者が多いように感じられるのだが。

「テイセ？テイセならフォルツアーノに行けるって喜んでいたのです。」

「ナヌ　　!？」

ジャスティンの野郎、よくも姉上をたぶらかし……ぐ、ごほんもとい、姉上がそんなにもジャスティン王子のことを想っていらしたとは……!

「邪魔したる。」

「ほへ？か、カイト様??目がすわっているのですよ??」

姉上は渡さない。そもそも僕は嫁に行く気など全くないのだ。よって、こんな縁談など僕の手で破談にしてくれるわ!!

「テイセラ姫、どうされました?このような場所に呼び出したりして……」

さわつと風が吹く。時は夕刻をまわり、あたりはすでに薄暗い。

城の中庭、昼は陽光のもと咲き乱れる花々も今は眠りに落ちようとしている。風でひらひらと靡く白のドレスだけが色彩を失いつつある世界の中で妙に目に眩しい。

「……あ……あの、二人きりでお話したいことがあって……」

「そんなに緊張することはないのだよ、可愛い人。私と二人きりになりたいなんて、おお、なんと神の思し召し。丁度私もあなたと同じ気持ちだったのですよ、ティセラ姫。」

ジャステイン王子は僕のことを姉上と信じて疑わないようだ。一応、姉上が昨日の夜会で着ていたドレスを装備し、姉上よりも短い髪は結び上げてリボンとウィッグで誤魔化している。言っておくけど、僕に女装の趣味があるわけでは決まてない。だ、誰にもこんな姿を見られませんように・・・そういうわけだから迅速に、計画を実行せねばならない。僕は姉上のふりをしてジャステイン王子に幻滅されなくてはいけないのだ。

「それにしてもティセラ姫、今日の貴女は昨日にも増して愛らしい妖精さん・・・一夜毎にヴェールを脱ぎ捨て増す魅力はまさに神秘・・・私の心も早鐘のごとく鳴り響き、この狂おしい気持ちに永遠に終止符が打たれることはないでしょう。」

・・・ジャステイン王子が何を言ってるのか僕にはよく理解できなかったが、彼は姉上を虜にするほどの男性だ。この台詞回しもよく勉強させてもらうことにしよう。

ところでジャステイン王子と僕の距離がいやに近いのが気にかかるところで・・・ジャステイン王子の吐息で前髪が揺れるほど、お互いの顔が近い。僕はじりじりと後退りするが、その分ジャステイン王子が接近してきて距離が遠のくことがない。これは、何とか早く決着をつけないといけないような、いやな予感がする、とても。

「あの、それでお話なのですが・・・」
「私たちの間に最早言葉など必要ないのでしよう。必要なのは世界の中に私と貴女、ただそれだけ。おお、なんとという愛。これが理想にして至高の愛・・・」

折角用意してきた言葉も、ジャステイン王子の異様な盛り上がりで吞まれて出てこない。そのうちに、背中に壁がどん、と当たった。これ以上は後退できない。どうしよう、何だか想定外の展開になってきた。逃げ場を失った僕は何とか打開しようと考えをめぐらせた

が、気が焦るばかりでいいアイディアなど浮かんでこない。

「テイセラ姫……」

「は……い……」

ジャステイン王子の手が僕の顎に掛かった。ジャステイン王子は真っ直ぐ僕を見つめている。僕は視線を逸らすことができない。二人の視線が絡み合う。ジャステイン王子が僕を抱き寄せ、これはキ・ス……？

ダメだ！もう逃げられない！！

僕は思わず目を閉じた！！

どげしっ！！！！

「テイ……テイセラひめ……？」

ジャステイン王子はぱたりと倒れた。私の放った蹴りがジャステイン王子の急所にクリーンヒットしたのだ。

ってか、この状況、どーということさ！！！！

「悪いけど私、あんたみたいなの趣味じゃないのよねー。んじゃ、サヨナラッ。」

相手が隣国の王子ということを考えて、私は優雅に微笑み、ジャステイン王子を踏みつけてその場を後にした。隣国の王子でなかったらどうなっていたか、それは語ることもないだろう。

「おお……そんなあなたも素敵だ……ぐふっ……」

ジャステイン王子は最後の言葉をそう残して昇天召された。

丁度陽が落ちて私と入れ替わったから未遂で済んだけど、カイトの奴、私のドレスなんかで着飾っちゃって、このキモ王子と何しようとしてんだか。信じらんない！！

いや、待てよ……？

もしかしてカイトの奴……

そっか！そーいうことだったのね！

まあ弟とはいえ他人の趣味にとやかく言う気はないし、姉は生暖かい目で見守ってあげるわよっ！

そして夜は開け、フォルツアーノからの親善大使御一行は帰国されることになった。

終始和やかに親交が行われた（と思ってる）ため父上はにこにこして彼等を見送っている。

僕はといえば、昨日のことを考えると恥ずかしくて恥ずかしくて顔を赤くしたままずっと俯いていた。しかし、あの後姉上とジャステイン王子はどうなったんだろう?? ファムは何も語ろうとはしないし、激しく気になるところではあるのだが・・・

「テイセラ姫。」

「は・・・はい・・・」

しまった。ジャステイン王子が突然振り返り僕に話しかけたものだから、僕は思わず返事をしてしまった。今日の僕は王子らしい服装をしているにもかかわらず、ジャステイン王子には僕が姉上に見えているらしい。・・・僕って一体・・・

「昨日の貴女は私に新しい世界を目覚めさせてくれました。貴女ほど素敵な女性に巡り合えた私はなんといい幸せ者なのでしょう。お父上の許可も頂いたことですし、貴女が成人し、わが国に迎え入れることのできる日を楽しみにしております。その際には是非昨日の続きを・・・」

きらりと爽やかにジャステイン王子の歯が光った。

「ええ、是非に！」

何も知らない父上は極上の笑顔で返答した。

僕は顔を引きつらせたまま、ただ立っていることしかできなかつた。というか、昨日の続きって一体・・・??

「テイセラ

ッ！」

夜空には蒼月アルカーシャが、波の音すら聞こえてきそうな程に

近くに見える。その脇には常に、アルカーシヤの半分くらいの大きさの紅月ヴェルジュが炎を纏い鎮座している。二つの月の光が交わり、淡紫のヴェールに私たちは包まれている。

「ティセラ　　ッ！」

あーもう、いつものことだけどおとーさまってばうるさいなあ。

「ティセラッ！！聞いておるのかッ!？」

そういえば私はおとーさまに執務室へ呼ばれていたんだっけ。

「うっさいなあ、もう。話って何よ。」

「なな何だその言葉遣いは！何度も言うようだがおまえにはアストレイアの姫としての自覚が足らんだ！！姫ともあるうものが・・・」

「バンツ、と机が叩かれた衝撃でひらり、と机の上に整然と置かれていた書類の山が空を舞っていた。」

「無銭飲食だの、公共物の破壊だの一体どういうことだあ！！」

「そんな細かいこと気にしてるから、その年でヅラなのよ。」

「誰のせいだと思ってるんじゃない！！！」

おとーさまのヅラが、ずるりとズレた。側に控えていた大臣の顔に縦線が入る。

「そんなことよりおとーさま。カジ・・・グランティシアに遊びに連れてつてくれるって話はどうなったの？約束は守ったはずよ。」

「ぐ・・・ぐむう。いや、しかし、それはダメだ。」

「え　　っ!?!何でようっ!?!」

「いいか、ティセラ。ワシはこう言った。『ちよっつとでも口を開いたり一步でも動いたりしたら、この約束はナシだ。』と。おまえはジャステイン王子に歩み寄られたとき、確かに言ったはずだ。」

『はあ?』と!?!」

「はあ?」

勝ち誇ったように言うおとーさまに私は、怒りまくって言った。

「ちよっと！何よソレ!!それくらいどうだっていいじゃない!？」

「約束は、約束だ。それに一步も動かない、というのも守れていな

かったしな。」

くっ、このオヤジ、重箱の隅をつつくようによく見ている。小姑か？

「今回は良かったが、おまえにボロを出されてはこの縁談が破談になっってしまうからなあ・・・」

「あつつつつつそう。いーわよ、そっちがその気なら、勝手に行くから！」

私は腰元から水晶でできた杖を取り出した。掌に収まるほどの長さの杖は、私の魔力に反応して身長ほどの長さに伸びる。その杖に腰掛けると、杖は私を乗せてすいっと動き出した。窓を抜け出し、私の身体は城から夜空の下へと飛び出した。ここまで来ればおとーさまの手は届かない。

「衛兵、衛兵はおらぬか！テイセラが逃げた！！力ずくでも連れ戻せッ！！！！！」

その辺の衛兵に、私が捕まるわけないじゃん。おとーさまも学習能力が無いんだから。

「テイセ、また城下に遊びに行くの？」

寝坊助ファムがふわっと現れて訊いてくる。

「違うわ。行き先はフォルツアーノよっ！カジノで豪遊よっ！！！」

「ええ??テイセ、本気なの??」

「モチよ!!!さっ、出発よッ!!!」

杖は私を乗せて急加速する。光の軌跡をアストレイアの夜空に残し、期待に膨らむ私の心はフォルツアーノへと向かうのであった。

第2話

うぬう・・・この私としたことが、ぬかったわ。

さてさて、フォルツアーノ王国へ意気揚々と向かっていた私、テイセラだったが、だがしかし！そうは問屋が卸さなかったのだ。

ことの発端は小妖精ファムの一言から始まった。

「ねえねえテイセ、フォルツアーノへ行くのはいいけど、ちゃんと方角、知ってるの？」

「知らない。」

「・・・・・・・・」

ふっ。何を隠そう何も隠さない、私はここアストレイア王国の王女、つまり箱入りお姫様。お忍びで城下町へ降りたことは何度もあるけど、他の国まで出掛けたことはない。そりゃ、学として地理くらいは分かるわよ。でもね、地図上で知っていても実際どっちへ行けばフォルツアーノなのかは、全く見当もつかなかった。

とすると、あれですか。私の冒険譚は始まる前から終わっていたと。

呆れた様子のファムの視線が、何だかイタイわ・・・

「そ、そういうファムこそどーなのよっ。フォルツアーノの場所、知ってるの!？」

「ファムが知ってるわけじゃないのです。この世界に召喚されてからずっと、テイセの側にいるのですよ?」

言われてみればそうだった。ずっと私の側にいたファムが、外の世界を知っているはずがない。

「仕方ないのです。フォルツアーノへ行く機会はきつとまたあるのです。だから今日は、お城へ戻りましょうですの。」

「何言ってるの。せっかくここまで来たんですもの。意地でもフォ

ルツアーノへ行ってみせるわ。」

「えええ……」

「イヤならついて来なくてもいいのよ。別に頼んだわけじゃないし
ー？」

「い……いや、行きますとも。カイト様をお守りできるのはファ
ムしかいませんもの！」

……ファム、あんたも所詮カイト派か。

双子の弟カイトは、万人受けするタイプなのか男女問わずいるんな人から好かれていようだ。とくにオツサン人気が異様なほど高く、噂では親衛隊が結成されたとかどうか。そのせいかカイト自身も一般的な女の子より……いやいやこの話はカイト君の秘め事ゆえ、優しいオネーサマとしては黙っておいてやるか。

このカイトと私、とある事情により一人分の時を二人で分け合うことでしか存在できない。つまり夜である今現在は私がここに存在してるけど、昼はカイトに入れ替わっちゃうってわけ。ファムは私とカイトにしか見えない、二人のホットライン的存在の精霊だ。

「ともかく、ここでこうして浮かんでたら、すぐに追っ手に捕まっちゃうわ。一旦その辺の町にでも降りるとしましょ。」

蒼月アルカーシャを背に、私は魔法で浮かせた杖に横乗りしているのだ。眼下に広がる世界を見渡し、黒い森の只中に灯る町明かりを発見した私はそれに向かってすうっと杖を走らせた。

私が降り立ったのは中規模程度の町で、陽が落ちてまだそれほど時間も経っていないため通りはそこそこ賑わっている。

「さて、情報収集といえばまずは酒場よねー。」

「何言ってるですか！未成年が酒場なんてダメなのですう！それにテイセ、お金を持ってるですか？ここは城下じゃないです、踏み倒しは犯罪ですよ！」

「お金……ねえ。」

言われてみりゃ私、無一文なんだよなあ。さすがに顔の割れてないところで無銭飲食したら、やつぱ捕まっちゃうかね？となると、何か持つてるものでも売りさばいて路銀を作っといたほうがいい。丁度目の前に質屋があるし。何かお金を換えられそうなもの・・・
「？テイセ・・・？なんでファムのことそんなに見てるのです？ままま・・・まさか・・・」
「いや、あんたよく見れば普通の妖精とちょっと違うわよね。レア価値ありぞ」
「なに考えてるんですかあ、ファムを売り飛ばす気！？だだだダメですう！！！」

ファムはすごい勢いで逃げていった。うーん、あの鳥の翼みたいな6枚羽つて見ないのよねー。普通妖精っていったら蜻蛉みたいな羽だもんね。
「やあねえ、そんなことこの私がするわけないじゃん。だって、あんた私とカイトにしか見えないんだから、売りようがないもの。」
「・・・他の人に見えたら売る気満々じゃないですか・・・」
ファムが不信に満ち満ちた目で私を見る。
「だけど、ホントにどうしようかな。ファムが売れないとなると他には・・・」

どんっ！

考えてると背後から突然誰かがぶつかってきた。

「きゃっ！」

不意のことだったので、私はよろめいてそのまま膝をついた。

「あたたた・・・」

「つと、悪いな。」

見上げると私にぶつかってきたのは、背が高く細身の青年だった。フードつきのマントを目深にかぶっているので顔ははっきり見えなかったが、眼光が鋭く磨いたナイフのよう。ちよっと見た目怖そ

うがいいですの。」

ファムの言葉によくよく追っ手を見ると、確かにその制服には力デリナ聖教区の異端審問官の紋章が刻まれていた。ってことはこいつら、私を捕まえるためにおとーさまが放った追っ手じゃないってことか。よくよく考えたらおとーさまごときが放った追っ手が、こんなに早く私に追いついてくるわけがない。

んじゃ追われてるのは私の目の前に行く青年のほうか。まあ確かに悪党ヅラしてるもんねえ。

「ちよつとあんた、あんなのに追われて何かしでかしたの？ひよつとして賞金首とかだったりする？」

「おまえには関係ねえだろ。俺に関わるな。」

「そーはいかないわ。あんたに懸賞金でもかかってるなら、絶対捕まえてやる！！」

私は手を伸ばして、前に行く青年の腕を掴もうとした。瞬間！！
「っつて、えっ、はわっ！？」

ずでんっ、と何かに足をとられ私は派手にすっころんだ。足元を見ると、どこから伸びてきたものなのか鳶が絡まっている。

「あたゝ・・・んもう何よっ！信じらんない！！」

鳶を引きちぎって起き上がると、青年は夜の町の喧騒の中にすでに消えていた。辺りを見回すが、彼の姿はどこにも見当たらなかった。

「逃げられたか・・・」

せっかくお金が手に入りそうだったのに獲物を逃してしまい、私のはがっかりしてその場に立ち尽くした。と、そこへ

「おい、おまえ。今の男の仲間か？我々と一緒に来てもらおうか。」

振り返ると、そこには異端審問官の姿があった。私は後ろ手に腕を捻り上げられ、彼等に捉えられてしまったのである。

「放しなさいよ！！何度も言うようだけど、今の奴とは知り合いで

も何でもないっての!!」

「それは調べた上で決定されることだ。連れて行って牢獄へ閉じ込めておけ。」

何なのこいつら。人の話は全く聞かないうえ、頭が固いつたらない。しかしこのままではマジで牢獄へ入れられてしまいそうな雰囲気だ。しゃーない、名を出して権力行使は好きじゃないけど、背に腹は変えられない。

「あんた達、私を誰だと思ってるの。アストレイアの王女ティセラよ。そんなことが許されると思ってるの!？」

さすがに名を聞いて、異端審問官は足を止めて私をまじまじと見た。

「ティセラ王女がこんなところにいるわけないだろう。それに、ティセラ王女といえば儂く可憐で泡雪のような美しい姫だそうだ。おまえのようなガサツな女のわけがないわ。嘘をつくならもつとマシな嘘を考えることだな。」

言うてこいつら、再び私を連行して歩き出した。くそう、なんてこつたい……

こんな私を見てファムはふるふると震えている。

「ファム……」

大丈夫よ、と元気づけようと思ったらファムの奴、必死で笑いを堪えてるでやんの!

「ごめんなさい、ティセ。あまりにもおかしくてつい……ぷふっ」

あー、そうかいそうかい。気を遣ってやったのに、馬鹿らしいっ
たらない。

でも、どうしよう?魔法でこいつらを薙ぎ倒してやるうかとも考えたけど、さすがにカデリナの異端審問官ともなると魔法を無効化するアウラ銀が官服に縫いこんである。さすがに力づくでは切り抜けられるとは思えないし……

結局為す術も無いまま、私は異端審問官に町の中心部に鎮座するカデリナ教会へと連れて来られた。

カデリナ聖教区は、この大陸を構成する六王国の中央にあり、聖皇ユーリエスを筆頭とする絶対不可侵の地である。あくまでも教区という立場をとっているが、第七の宗教国家と言っても過言ではない。カデリナというのは太古に実在した女性で、その教えを説いたカデリナ教会は大陸のいたるところに散在している。このカデリナ教会つてのが魔法に対して反目的なところがあって、魔法国家アストレイアとは正直微妙な関係。でも、この教会の持つ他国に対する影響力は大きいから、おとーさまは友好関係を維持するべく日々画策してる。

だから、私が拘束された教会内でその人物に出会うとは、予想もできなかった。

「学長・・・？」

それは私が在籍するアストレイアの大学の学長だった。長く白いあごひげに、おとーさまに勝るとも劣らない見事なつるぴかヘッド。その厳しく冷たい眼差しが私は苦手だった。つてかむしろ、私の天敵。

「なんで、学長がこんなところに・・・？」

「それはこちらの台詞でしょう、ティセラ王女。」

「ごもつともな意見だ。しかし身分が学長により証明されれば、私はこの状況から解放されるはずだ。強制送還かもしれないけどさ・・・」

「へえ、彼女がアストレイアの姫君か。ディスタンスがそう言うのなら違いないんだろうね。」

ディスタンスつてのは学長の名前だ。この厳つい学長を気安く呼んだのは、まだ年若い、私より2つ3つ年上であろう男子だった。柔らかい光を放つ銀の髪に、吸い込まれそうなほどに澄んだ紫水晶の瞳。服装から見て教会の関係者だろう。神秘的な容貌をした彼はしかし、茶目つ気たつぷりの笑顔を見せて私に話しかけてきた。

「お初にお目にかかります、ティセラ姫。僕はカデリナの聖司祭司レクセウスと申します。以後お見知りおきを。貴女のこととは色々と聞

いていたけれど、噂どおりの方のようだ。」

噂どおりって、どんな噂を聞いたんだか。褒められてるのかそうでないのか、今一つわからない。

「ふわぁ、素敵なかたですぅ〜！」

ファムは聖司祭レクセウスを前にして頬を赤く染めている。アンタさぁ、ジャステイン王子を見て同じこと言っただけじゃなかったっけ・・・？でもこのレクセウスって人、実年齢いくつなんだろ。聖司祭っていえば教会内でもかなりの高位になるから、それなりの年ではあるんだろっけど。

「それで、カデリナの聖司祭様がこんな辺境の町にどういった御用なのかしら？それに学長とはどういう関係なの？」

「貴女とよく似た理由じゃないかな。お忍び、という名目でね。デイスタンスとの関係は、秘密・・・ということにしておこうかな。」
むっ。つまり部外者である私には何も教える気はないということか。

「まあいいわ、そういうことでも。で？私のことはどうするつもりなのかしら？」

「僕個人の客人としてもてなしてもいいんだけど、さすがにデイスタンスが首を縦には振らないだろうからね。丁重に王都までお送りして差し上げますよ。」

にっこりと余裕のある笑みを浮かべるレクセウス。うぐうっ・・・やっぱ強制送還か・・・

「しかし今日はもう遅い。今夜はこちらで泊まっていたら、明日の朝発つことにしましょう。部屋へご案内しますよ。」

明日の朝、ね。あああ、私の時間、終わってるじゃん・・・

そう言われて通された部屋は、教会だけあって質素なものだったが居心地は悪くはなかった。ただし、学長が去り際に吐いた台詞のせいで気分は害されたけどねー。

「テイセラ姫、逃げ出そうとしても無駄ですぞ。貴女の魔法などのディスタンスにかかれば、赤子同然のものなのですからな。」

だつてさ！私の能力に内心びびってるくせに！！

「ファム、ちよつとあんた学長とあの聖司祭の周辺を探ってきたさい。なーんか、怪しいのよね。」

「えええ、やつと休めると思ったのに……」

ファムはぶーぶー文句を垂れながらも部屋を出て行った。ファムの存在はあの二人に気付かれていないし、私がファムと精神共有することでファムの目や耳を通して得た情報を私が直接知ることも可能だ。

目を閉じて意識を集中させる。ファムが教会内をゆらゆらと飛ぶと、薄明のフィルターがかかったような映像として私の脳内に再生される。……教会内は薄暗い廊下が真っ直ぐ伸びている。廊下は石壁で囲われ、重苦しい雰囲気だ。行けども行けども同じような景色ばかりと思いきや

「テイセ、この壁おかしいです。結界が張られてるです。」

ファムの目の前には何の変哲も無い石壁が連なっている。ということは、おそらく隠し部屋に繋がる扉を結界で石壁に見せかけてるのだらう。

「結界を張るなんて、ますます怪しいわね。どーせ物理的なものに対する障壁でしょ。ちよつと中、入ってみて。」

「うう、危険じゃないですかぁ……」

「あんた私以外の人に見えないんだから大丈夫でしょ。」

ファムってば小心者なんだから。こういうとき便利な身体してるくせに。

私の予想通り、精霊体であるファムの身体は結界を容易くすり抜けた。まあ、人に使役される精霊体なんて高位の魔法士でもなかなか持つてないし、こんな辺境の町で警戒する必要性なんてないだらう。でも、教会内で結界なんて、身内にすら秘密にするような何かがこの先にはあるんだらう。それって一体何……？

結界の中は曲がりくねった通路にいくつもの階段、まやかしの扉などが複雑に絡み合った迷路になっていた。その迷路を抜けた先に一つの小部屋があり、そこに学長と聖司祭がいた。

「それで・・・手に入ったのかい？花は・・・」

「はい・・・こちらに・・・」
花？

途切れ途切れにだが会話の断片が聞こえてくる。レクセウスの間に学長が答えているようだ。

「・・・フェリアージュの闇オークションで・・・取引を・・・」
オークション？

学長の前に、布が被せられた大きな物が見える。

わかった！とどのつまり、二人はお花大好きっ子つながりのお友達で、それを秘密にするためにこんな手の込んだことをやってるってわけか！確かに聖司祭はともかく、学長がお花大好きっ子っていうには違和感アリアリだもんねえ。

「ファム、もーいいわ。戻ってきて。」

「あや？いいのですか？」

「だって、学長の趣味なんて興味ないし！」

学長が花を愛でてるとこなんて見てもねえ。はつきりいつて、時間無駄。

「了解です。」

ほっとしたように言い、ファムは踵を返そうとした。瞬間、視界の残滓に映った異様なモノに私は息を飲んだ。

学長が、掛かっていた布を取り払って見えたものは、お花なんて可愛いものじゃない。

ひと、だった。

それも、少女。私より2つ3つ年下くらいの女の子が、大きな鳥籠の中に閉じ込められていた。それを見てしまったファムも動きを止める。

「ちょっと、どういうこと！？あの子が学長の言う花だってこと！

？人身売買は禁じられているはずよ！」

「・・・そうだね。だけど彼女は人じゃない。限りなく人に近い外見をしているだけの、妖だよ。テイセラ姫？」

私はぞつとした。私の声が聞こえているはずがないのに、ファムの姿が見えているはずがないのに、何故聖司祭がこつちを見て私の問いに答えるの！？

「テイセ・・・」

ファムは泣きそうなほどに不安な声を出す。レクセウスが私の名を口にしたことで、はつとしたように学長が彼の視線の先を追う。

「過ぎた好奇心は身を滅ぼしかねない。例え貴女がアストレイアの王女だとしても、ね。」

レクセウスが私に向かって腕をすつと上げる。フツと私の視界が暗転した。身体からは重力が失われ、空間を浮遊しているような感覚に囚われる。だがそれも一瞬のことで、気がつくと私は聖司祭の前にいた。つまり、こいつに強制移動させられたってわけだ。しかも私の身体はレクセウスによって創られたのであろう球体状の結界の中に閉じ込められている！私は自身の魔力で結界を破ろうと試みたが、この空間の中では穴の開いた器に水を注ぐのと同様に、魔力が零れ落ちてしまうようだ。

「デイスタンス、結界というのはこのように張るんだよ。」

「申し訳・・・ありません・・・」

この部屋に張られた結界は学長によるものだったのだろう。私に容易く侵入されてしまったため、学長の面目もまるつぶれだ。ふふん、いー気味。

じゃなくて！

「何するのよ！ここから出なさい！！」

「秘密を知ってしまった以上、このままお帰しすることはできないな。或いは、僕たちと秘密を共有していただく、か。」

聖司祭は、出会ったときと同じように悪びれなく笑顔を見せる。

「お断りよ。誰があんたたちの言いなりになるもんですか！」

何が起こっているのか把握できてるわけじゃないけど、直感的にわかる。こいつらがやるうとしてるのは、良くないことだって。だから私は、レクセウスの申し入れを蹴っ飛ばした。

「それじゃ仕方ないね。幸い、姫がここにいることは僕たちしか知らないわけだし。姫に何かあったとして、アストレイアとカデリナの関係が悪化することはないから。僕としてもアストレイアを敵に回す気は無いしね。」

そう言い残して、レクセウスと学長は出て行ってしまった。この誰も来ないであろう空間に、魔力を封じられ、身動きできないままの私を残して

って、ウソ!? 私、一生ここでこのままなんてこと、ないよね!?

第3話

ちょっとちょっとちょっと！マジでありえない？この状況！

私、アストレイアの王女ティセラはフォルツァーノ王国目指して旅立ったのだが、途中立ち寄った町でカデリナの異端審問官に囚われてしまった。私の身柄は偶然出会ったアストレイア王立大学学長デスタンスによつて証明されたのだが、彼とカデリナの聖司祭レクセウスが秘密裏に手に入れた「花」の正体を知ってしまったため、私はレクセウスに魔法を無効化する結界内へ閉じ込められてしまった。

そして現在の状況、出られん。

「ぶるああああ、出せやコラア！！！」

私はしつちやかめつちやかに暴れまくる。だがしかし。

この球体状に張られた結界、魔法が使えない上に物理的な障壁になっているため、中で私がどうあがこうが全くムダってワケ。この結界の外に出るためには、術者であるレクセウスが魔法を解くか、術者と同等かそれ以上の能力をもつ術士が外側から結界を破るしかない。

でもなあ、この状況でレクセウスが術を解くとは思えないし、レクセウス以上の術者なんてそうそういるとは思えない。いたとしても、このカデリナ教会内の、隠された部屋の中へはいはいやってくるはずがない。

どうすることもできないまま、私の時間に正確な腹時計が言うには小一時間が過ぎただろうか。あれこれと考えた脱出方法はどれも功を奏さず、私はもうめんどくなくてその場にどさりと座り込んだ。「ティセ、もう諦めちゃったのですの？」

幸か不幸か、小妖精ファムも結界内に閉じ込められている。ファ

ムは私と双子の弟カイトにしか見えないはずなのに、レクセウスはその存在に気付いていたみたいね。

「そーいうわけじゃないけど、飽きた。」

「あ・・・飽きたってテイセ、脱出できなかつたら一生このままかもしれないですよ？」

「じゃあどうしろっつもの・・・」

私は膝を抱えて顔をうずめた。何だか疲れちゃった。目を閉じると急速に睡魔が襲ってくる。

ほんの数分、うつらうつらとしていただろうか。こういつ時って、夢なのか夢でないのか、記憶の断片が頭の中をいくつもいくつも掠めていくのよね。

その記憶のかけらに浮かぶ、淡い金の髪・・・いつ頃の記憶なんだろう。多分とても幼い頃出会った人だ。小さな私は彼を仰ぎ見ないといけなかったから。顔もよく覚えていないけど、とても優しい目をした男の子。彼のことはこんなとき、よく思い出す。紫がかった薄桃色の空、月の光を反射する白の花の絨毯。異世界のような光景の中に彼はいる。どこでどうして出会ったのかも記憶の奥底ではつきりしないけど、彼のことを思い出すと何だかとても切ない気持ちになる・・・

ふっと意識が浮上した。現実の私は相変わらず薄暗い部屋の球体の中にいたけど、さっきまでのちよつとめげそうだった私はもういない。

「そうね、諦めるにはまだ早すぎるわ。」

私は言って立ち上がる。

「こんなところで余生を過ごすなんてやってられないわよ。さっさとこんなところおさらばして、カジノへ行くんだから！」

そんな私を見てファムがほっとしたように笑顔になる。やれやれ、ファムごときに心配されてるようじゃ私もまだまだね。

「それでこそテイセですの。もしかしていい考えが浮かんだですか？」

「全然。」

胸を張って言うつとファムはずっこけた。だってさあ、そんないい考えずぐに出てくるもんじゃないじゃん？とりあえず、私は落ち着いて改めて室内を見渡した。もしかしたら意外なところに意外な抜け道があるかもしれないもんね？

家具も調度品も無い殺風景な部屋だ。部屋の隅のほうに、物置のように何かの荷物が無造作にたくさん転がっている。扉以外は窓一つ無くて、息苦いったららない。

そして。

レクセウスと学長が言う「花」、人ではなく妖だという少女。かけられた布の隙間から、鳥籠の中に閉じ込められている彼女の姿が見える。本当に人と変わらない姿、エプロンドレスを身に着けた彼女は庶民の女の子にしか見えない。色素の薄い肌に柔らかなウエーブのかかった髪、ぱちりとした瞳はまるでアンティーク人形のように可愛らしい。ただ、よくよく見るとその髪の色は薄明かりの中緑がかかった銀色に鈍く輝いて、やはり人とは違うのだということを表していた。

「ねえ、あんた。」

私は少女に声をかけてみる。だが反応は無かった。

「聞こえてないの？妖さん。」

再度声をかけてみるが、やはり反応は無い。あらら、ひよっとして言葉が通じないのかしら？

「テイセ、どうする気ですか？」

「どうするも何も、単なる好奇心よ。興味あるじゃない？この妖が何なのか。だから異文化コミュニケーションでもはかってみようかなあって。でもダメね。妖には妖語しか通じないのかしら？ファム、あんた何か判らない？似たようなもんでしょ。」

「ひどいです！ファムは妖じゃないですよ！」

ファムはぶんむくれる。なーんだ、つまんないの。私とファムが言い争っていると、妖の少女が突然立ち上がり、私に向かって言う

た。

「ちよつと、さつきから黙って聞いてたら人のことアヤカシ、アヤカシって何なのようっ！あたしはニンゲンよ。アヤカシなんかじゃないのっ！！」

おお？意外とこの子、強気でないの。レクセウスとのやりとりを聞いてたわけだから、私がアストレイアの王女だつて分かつてるだろうし、それでタメ口聞いてくる同世代庶民の女の子なんて普通じゃない。私は妖かどうかはともかく、この子自身に断然興味が湧いた。「失礼したわ。私はテイセラ。テイセラ・リエル・ディア・アストレイア。あなた、お名前は？」

「エレハイム・ナギよ。」

「おっけー、エレハイム、ね。そう言うつてことは、今まで人として生きてきたつてことよね？生まれはどこなの？」

「ルピナ村よ。イサフィールドの、ずっと東のほう。」

うん、聞いても分かんなかったわ。つまり、ずっと遠くということね。

「じゃあ、帰りたいわよね。家族もそこにいるんでしょ？」

私がそう言つと、エレハイムは大きな瞳を潤ませてこくりと頷く。
「かと思いきや。」

「やーよ。あんな田舎、なあんにもないし。パパはカイシヨウナシだし。エレは都会で王子様のハートを射止めて、タマノコシに乗るのが夢なのよっ！」

「……………」

な、なんか見た目とのギャップの激しい子ね。私は思わず絶句した。

「なんだか、この子テイセにちよつと似てますのー。」

「そう……………」

ファムの言葉はどうにも解せなかったけど、まあいいわ。

「ともかく玉の輿に乗るにも、こんなとこにいたら始まらないですよ。どう？私と共同戦線を張らない？」

私がそう言うと、エレハイムは目をきらりと輝かせた。

「その話、乗るわ。テイセラさんはお姫様なんでしょ？ だったら素敵な王子様のお知り合いもいっぱいよね？」

「まあね。」

素敵かどうかは知らんけど、まあお知り合いはいるわよねえ。

「あ、私のことはテイセラでかまわないわ。」

「じゃ、あたしもエレでいいわ。友達はみんなそう呼ぶから。」

私はエレにぱちつとウインクして言った。

「それじゃ、エレ。これからよろしくね。」

それからしばらくの間、私とエレはそれぞれの生い立ちとか、好きな食べ物とか、コイバナとかについて話し合った。

「ちよつとテイセ、さつきから乙女話しかしてないですよ。脱出する気はありますか？」

ファムが訊いてくるが、だってねえ、仲間が一人増えたところで簡単に脱出する方法があるってんなら苦労せんっつーの。とゆるわけてファムの発言は軽くスルーする。

エレの話によると、彼女は本当に普通の女の子として今まで生きてきたみたいね。その異質な髪の色も、村の人たちが異端視することもなかったのでエレ自身疑問にも思わなかったみたい。まあ、ルピナ村って高所にあつて外界と隔絶されているみたいだから、村人も鷹揚なのかしらね。つてか、一般的に銀緑・・・というのかそんな色の髪の人間なんていないんだって知らないだけだったりして。

そんな平和な村で、エレは植物学者のおとーさまと二人暮らしをしていたそうだ。

「学者つていつでも甲斐性なしの単なるキノコオタクなのよ・・・」

つてエレは溜め息をついていたけれど。おかーさまはエレが小さい頃になくなつたらしい。境遇的には、私と似ているのよね。

彼女には物心ついたときから不思議な力があって、植物と対話ができるんだそうだ。その力は、特に蒼月アルカーシャの影響を大きく受けるらしい。彼女が妖と呼ばれるのもその力を所以とするものなのかしら。いやでも待てよ？妖って確か紅月ヴェルジユの影響を受けて活性化するのよね。それに、植物との対話・・・ねえ。魔法っぽいといえば魔法っぽいんだけど、どうなのかしら。少なくとも、うちの大学ではそういう系で研究してる人がいないから何とも言えない。

「で、んな平和に暮らしてて、何でフェリアージュの闇オークションで売られてたわけ？」

「それはねえ、レクセウス様があたしを探してるのを知ってて、あたしを売ったサイアクサイターのヤツがいるからなのようっ!!！」
私が訊くと、エレはふるふる肩を震わせた。怒り心頭なのは良く分かったが、事情はさっぱり分からない。

「どーでもいいけど、アンタ幼女拉致監禁するようなヤツに様づける、フツー？」

「えー。だって素敵じゃない？レクセウス様。地位もお金もあってイケメンなんてそうそういないわよ？それに、エレのこと探してくれてたなんて、運命の出会いかもっ。」

「ダメだこりゃ。エレってば乙女モード全開で、わたしについていけないわ。」

とりあえず、その最悪最低の人はエレをオークションにかける価値があると知ってたわけだ。んな価値のある妖っていたっけなあ？

・・・いや、待てよ？

「そうだ。禁書・・・」

唐突に私は思い出した。

そう、教会が認めた正当なる歴史の影に、闇に葬られた裏の歴史というものが存在する。それらが綴られたものを総じて禁書というのだけだ。勿論、禁書自体は公に知られてはいない。教会に悟られないよう歴史学者たちが内密に伝えているという代物だ。・・・っ

て、私がどうして禁書について知ってるんだろ・・・どこかで読んだような気がするけど、うーん・・・まあいいか。

蒼月の影響を受けるってんなら、精霊・妖精・天使、まあどれも異界に棲むとされている種族だけど、それらに属してることになる。その中で、創世の時代に人との争いに敗れたため、妖魔と烙印を押された種族がある。姿は人に似て、森の奥に棲まい、草や木や花と共生する世界樹より生まれし大樹の高位精霊。

「セラファタ族・・・？」

「！」

はつとしたようエレは私を見る。ちよつと警戒したような表情・・・確か、セラファタの血はどんな病をも癒す霊薬となる伝えられている。だからこそ人に狩られ、抵抗した彼等セラファタと人との間で争いが起こったのだ。その話が事実で、もしもエレがセラファタ族だというなら、オークションの高額取引にも、彼女が花と呼ばれているのにも頷ける。けど、セラファタはすでに滅びた種族と言われているのよねー。人の目に触れないよう、ひっそりと生きていたというのかしら。

「テイセラ、セラファタを知っているの？」

「知識程度よ。エレ、あなたセラファタなの・・・？」

エレは沈黙する。痛いほどの静寂の後、エレは口を開いた。

「違うわ。あたしは人だもの。でも、ママが・・・セラファタ族だったって、パパに聞いたわ。」

「つまりハーフってわけね。」

そうなるとセラファタの血の効果って受け継がれてるのかしら？レクセウスが探してたってことは、あるってことよね、多分。でも、学長やレクセウスがどんな病を癒されたいってのかしら。

はっ！学長・・・もしかして・・・頭のツルピカを気に病んで・・・！！

そしてレクセウスは・・・ツラね！間違いないわ！！あの若さでツラなんて、大枚はたいてでも髪を再生させたいわよね。全てのナ

ゾはこれで解けたわ。おまけに、ここを脱出する方法も思いついた。

「ねね、私はともかく、エレのことはこのまま放つとかれる事は無いはずだわ。学長か聖司祭、あるいは二人ともかもだけど、それほど長くなくここに帰ってくるはずよ。そのときがチャンスだわ。」

エレは私の話にウンウンと頷き、目を輝かせる。

さくってっと、果報は寝て待て、ってね！

予想通り、しばらくすると学長が姿を現した。

「さて、行くぞ。」

学長はエレの閉じ込められている鳥籠を魔力で浮かせると、その場に光の扉を作り出した。

「ちよつと、どこへ連れて行く気よ!？」

私が問いただすと、学長は慇懃無礼な態度で答えた。

「テイセラ王女が知る必要はありません。」

「あっそう、いいわよ。それより学長、ここにいつまで閉じ込めとく気？私やカイトが帰らなかつたらアストレイアがどうなるか、分からないわけじゃないわよね？それに、私には追っ手がかかっているもの。レクセウスは私が見つからない自信があるようだけど、私の魔力を追跡すれば、どこで消息を絶ったのかなんてすぐにわかるわ。アストレイアの人間はそれほど無能ではないはずよ？」

「……うむ……」

学長は私の話を聞いて考え込んだ。おし、あと一押しか!？

「分かつたら、その子を連れて行く前にレクセウスを呼びなさい。もう少し詳しく話したいわ。」

「姫のことは後ほど話し合おうとしましょう。レクセウス様は今忙しい。今はこれを運ぶほうが先ですからな。」

チツ。使えないヤツ。レクセウスのパシリのくせに。

その時、突然エレが倒れた。

「!!」

「・・・苦しい・・・」

エレは胸の辺りを押さえようとする。呼吸は荒く、ガクガクと震えている。

「どうした!？」

学長も驚いて、エレに声をかける。その瞬間、学長が創り出した光の扉はフツと消える。

「すごく・・・苦しいの・・・」

息も絶え絶えに訴えるエレに、学長は焦った様子だ。そうっと慎重に鳥籠を地面に降ろしてエレの様子を伺う。

「あらら、大切な商品が、大変ね。こんなとこに閉じ込めて、病気になるっちゃったんじゃない？」

私は焦る学長の背後から、それ見たことかってカンジで言っただ。私に焦る学長の背後から、それ見たことかってカンジで言っただ。

「姫は黙っておいでなさい。こんなところで花を枯らすわけにはいかんだ・・・!」

学長は必死な様子で言うと、鳥籠の扉を開き、エレに触れようとした。

「いや　　っ!!触らないで!来ないでえッ!!」

エレは苦しみながらも、学長に抵抗して暴れる。学長もどうしようもなく、途方にくれているようだった。

「当然の反応よね。あなたは彼女にとって見知らぬ男で、しかも自分を閉じ込めた相手だもの。学長では怯えさせてしまっただけだわ。

私なら何とかできるかも・・・いいえ、無理ね。こんな結界の中に閉じ込められた状態ですもの。」

「む・・・」

エレの顔色はみるみるうちに赤くなっていき、呼吸も不規則に乱れる。学長は考えあぐねていたようだが、自分ではもうどうしようもないことを悟ったようで、私に向かって言ってきた。

「・・・ここは、姫にお願いしてよろしいでしょうか。」

「私としても、彼女を見殺しにできないし、何とかしてあげたいわでも、この結界を解くことができるのはレクセウスだけなんですよっ?」

「・・・今、連絡をとります。」

学長は掌サイズの月晶石を取り出した。学長の両掌の間で魔力に反応して、月晶石は静かな光を湛え始めた。

「デイスタンス、どうした?」

レクセウスの声が、球体から発せられる。

「花のことですが・・・」

学長がエレのことについてレクセウスに報告する。レクセウスは事のあらましを聞き終わると、少し考えた後こう言った。

「そちらのことはお前に任せる。僕は今手が離せない。姫の結界は解くが、くれぐれも事は慎重に運んでくれ。」

「了解しました。」

話を終わると月晶石からは光が失われ、それとほぼ同時に私は結界から解放された。

「きゃっ!」

私は突然空中に放り出された格好になったため、そのままお尻から落下した。

「あた・・・」

あまりの衝撃に、涙が滲む。そんなことはお構いなしに、学長は私を上から見下ろして言った。

「では、頼みましたぞ。」

「わかってるわよ。」

ちよつとは私の心配しろよ。まったく。私はお尻をさすりさすり、エレに近づいた。

「ちよつと、見せてね。私は、あなたをどうしようってわけじゃないから。」

私は怯えているエレに優しく笑いかける。

「・・・これは・・・!」

「どうなのだ！」

「大変だわ！！学長、ここ、ちょっと見てくれる？」

学長はしゃがみこんで私が示した場所をまじまじと見つめた。エシは警戒したような表情は崩さなかったが、今度は暴れたりはしない。・・・私はそろりと一歩下がった。

「？特に何もなさそうだが・・・？」

「もっとよく見て！ほら！」

私は部屋に置いてあった何かの荷を後ろ手に持った。それは私にはずっしりと重い。

「ね？分かったでしょう？」

私はその重たい荷を振り上げる。

「うむ・・・どのあたりが・・・」

学長が振り返ったが、時すでに遅し。私の腕は重力に任せて振り下ろされる。

「！！！！」

びっくりしたような表情の学長の顔面にそれは命中した。がごつ、と鈍い音がして学長は昏倒する。あーらら、鼻血噴いて白目剥いたそのナサケナイ姿・・・大学の皆に見せてあげたいわー。意識の無い学長に、にこつと笑いかけて私は言う。

「分かったでしょう？こーいうことよっ」

その瞬間、奇妙な浮遊感のような感覚が私を襲った。学長が意識を失ったことで、この部屋そのものに張っていた結界が解けたのだ。

「テイセ、やったのですの〜！」

ファムが嬉しそうにくるくると飛び回る。

「まだ、油断はできないわよ。レクセウスはこの事にすぐ気がつくでしょうしね。早いとこオサラバしましょ。」

私はまだ蹲っていたエレに、親指をビシッと突き出してウィンクした。

「なかなか迫真の演技だったわよ、エレ。」

するとエレもニヤリと笑って親指を突き出した。

「大変だったわよー。笑いを堪えるのに、マジ苦しくてー。あはははっ！」

エレは緊張の糸が切れたのか、笑いが止まらなくなっちゃったみたい。

「ぶっ！あははははは！」

それで私もおかしくなっちゃって、二人してしばらくそこで笑い転げていた。

その後、私とファム、そしてエレは教会から脱出するために奔走した。やはりレクセウスにはれてしまったのか、やたらと警備兵が多い。私達は、警備兵に見つからないように隠れながら移動を行った。

「こつちよ！（たぶん）」

私は二人を先導して走る。警備兵のいない方へ、そして出口へ！だがしかし！

どんっ！

曲がり角を曲がった瞬間、不意に誰かにぶつかった。

「きゃっ！」

「つと、悪いな。」

見上げると、そこには鎧に身を包んだ警備兵が立っていた。．．．しまった、見つかったか！でも、相手は一人だし、何とかできるかも！？でも、この既視感は一切なんだ？？私は一瞬考える。

あああああ！！

よく見ると、兜から覗いた顔は私がオトシマエをつけそこなった青年ではないか！

「あれ、おまえ．．．」

向こうも私に気がついたようだ。ここで出会ったが1000年目、

きつちりオトシマエはつけてもらうか、と思つたら。

「ちよつとシキ！あんだ、こんなとこで何してんのよう！？」

エレが青年に食つてかかった。

「あん？ガキ、いたのか。ちつこすぎて見えなかった。」

「な・・・なによ！レディに向かつて失礼なヤツね！！」

どーもこの二人、お知り合いのようね！。

「テイセラ、言つたでしよう！？コイツよ！あたしを売つたサイアクサイターのヤツよッ！！」

エレは怒りにふるふると震えながら言う。青年はそれを気にする様子もなく、言った。

「しよーがねえだろ。路銀尽きたんだからよ。」

青年は兜を取つて床に転がした。すると、あれまあ。エレと同じ、緑がかつたサラサラの銀髪が露になった。この人も、セラファタだつたんだ！私は呆れて言つた。

「フツー売るか？仲間を・・・」

「仲間なんかじゃない！」

これには二人、仲良くハモつて答えてくれた。そして、ファムがぼそりと私の耳元で言つた。

「ファムを売ろうとしていたのは誰ですの・・・」

や、やあね。そんなことまだ覚えていたのね。私は話題を変えるため、シキに話題を振つた。

「でも、危険を冒してここまで乗り込んでくるなんて、エレを助けに来たのよね？」

「いや。バイト。」

シキは心からそう言っているように・・・見えた。

「あんだと別れた後、張り紙で見て面接行つたら通つてさ。ここ、時給いいのな。」

「つて、あなた異端審問官に追われてなかった・・・？」

ま、まあシキはこう言ってるけど、本当はエレを助けに来たはずよ！・・・たぶん。

シキの話によれば、レクセウスはカデリナの聖都ファレナに帰国したそうだ。警備兵が多いのは、レクセウスの不在を補うため増員されたのだろう。だけど、一般の警備兵が多少増えたところで、怖いのはレクセウス一人だもの。そのため、後はシキの案内で簡単に教会を脱出することができたのだった

「やっぱシャバの空気はおいしいわねー。」

私は大きく伸びをする。もうすぐ夜明けだ。いやいや、長い一日だったわ。

私は、ちやぷんと湯船に肩までつかる。そう、私は宿をとり、今温泉に浸かっているのだ。うーん、いいお湯。こんな時間に温泉に浸かっている人は全然いないから、とつてもものびのびできる。私のほかは、地元のおばーちゃんか二人いるだけ。

え？宿の代金はどうしたのかって？シキがエレを売ったときかなりの額になったらしく、ちゃんとおトシマエ、つけてくれたのよね。

彼等とは、教会を出たところで別れた。二人は旅の途中で、陽が昇る前にこの町を後にすると言っていた。まあ、ここに留まってまた捕まったら笑い話にもならないし、お別れするのは残念だったけど私は引き止めはしなかった。

「えー、もう行っちゃうの！？カイト様や、ティセラのお知り合いの王子様がたにご挨拶したかったのに。」
「エレも、とつても残念そうだったわね。でも、何だかあの二人とはまた会えるような気がするなあ。」

温泉に浸かって私は、疲れもあって何だか眠くなってきた。気がつくのと、顔までお湯に浸かって・・・ぶくぶくぶく・・・

はっ！！

「ゴホゴホゴホッ!!」

お湯を思いつきり吸い込んで、僕は思いつきりむせかえった。

「ん?・・・ここは・・・温泉??」

僕は立ち上がって周りを見渡す。すると、むせかえっていた僕を心配したのか人影が近づいてきた。

「あんだ、大丈夫かね?」

「あら、女の子だとばかり思っていたら、おやおや可愛い坊やだねえ。」

二人の年配の女性達の視線が、一点集中する。

「カイト様・・・きやつ。」

そして目を手で覆ったファムの、指の隙間からの視線も。

「わ　　ッ!!!!!!」

僕は頭の前までお湯の中にリターンする。すると、外のほうから若い女性達の声が聞こえてきた。

「朝から温泉に入るっていうのも、旅の醍醐味よねえ。」

「ここ、露店になっているらしいのよ。楽しみだわ。」

もしかしなくても・・・ここわ女湯ですね・・・?

ちょ・・・姉上、この状況、どーしてくれませんかあっ!!

第4話

「おかえりなさいませ、ご主人様。」

さわやかな挨拶が、酒場内に響き渡る。ウエイトレス達が今日も天使のような無垢な笑顔で、ご主人様達に接客している。

汚れを知らない心身を包むのは、深い色のワンピースに白のレースエプロン。

ロングスカートを乱さぬように、エプロンは翻さぬように歩くのがここでのたしなみ。

メイドさん酒場。ここは、メイドさんの園。

って、一体僕は何やってんだか……!

「カイト様、お可愛らしいですのー!」

小妖精ファムが、ふわりと舞う。僕は手にしていたトレイを、ガチャン、と乱暴にシンクの上に置いた。

「ファム、何故姉上をお止めしなかった!？」

そう、気がついたらもう、僕はこのメイドさん酒場で働くことに決まっていたのだ……!

「お止めしましたよ。でも、ファムにティセを止められると思っ
てますの?」

思わない。思わないけど、ファム、おまえ姉上とグルだろう?それが証拠にさつきからずっと目が笑っている。

「ティセラちゃん、お疲れ様。今日はもう上がっていいわよ。」

「あ、はい。」

酒場のマスター(男・マッチョメン)が顔を覗かせて言う。僕はにっこり笑ってそれに答えた。……姉上の印象を悪くするわけにはいかないからな。

そう、僕と双子の姉上はとても良く似ているらしい。らしい、というのもう10年程姉上とは顔を合わせていないためだ。昼は僕、夜は姉上というように、僕と姉上は昼夜で時を分かち合うことによ

って存在している。僕達の間をつなぐのが小妖精ファムで、これは僕と姉上しか見ることができない。

そんなわけで昼は僕がメイドさん酒場で働き、夜、姉上は・・・あれ？何かおかしくないか・・・？まあ、それでも姉上が喜んでくれるのなら、僕は・・・

「テイセラちゃん、アルバイトと言わず本気でここで働かない？テイセラちゃん、すごく人気あるのよね。」

「い、いえ、結構です。」

僕はそそくさと、二階へ駆け上がる。借りている部屋へ駆け込むと、僕はそのままベッドの上へ倒れこんだ。

「つかれた・・・。」

横になると、そのまま僕の意識は闇の中へ沈んでいった・・・

ふうつと意識が浮上する。起き上がって自分の姿を見ると、私はメイドさんの衣装を身につけたまま、ベッドに横たわっていたという事に気がついた。

「あら？カイトったら、この格好のまま寝ちゃったのかしら。よっぽどメイドさんルックが気に入ったようね。」

カイトの趣味は、姉の私が言うのも何だが男の子としては相当おかしい。好きな相手はフォルツァーノの王子様だし、加えて女装趣味ですか。

「・・・違うと思いますの。このアルバイト、押し付けたのテイセじゃないですか。」

耳元でファムが呆れたように言う。あら、ファムそこにいたの。でも、ファムはそういうけどねえ。

「イヤだったら、やらなきゃいいんじゃない？まつ、いやいやよも好きの内って言うしね。」

「・・・カイト様、お可哀相・・・。」

そうそう、何で私が・・・いや、もといカイト君がアルバイトを

しなきゃいけないかったかというところ……じゃじゃーん！ついに私、フォルツァーノ王国の王都グランティシアに辿り着いたのよねー。途中立ち寄った町でカデリナの異端審問官に捕まったりと波乱もあったけど、そこで路銀も手に入れたし、後は問題なくやって来れたってワケ。グランティシアで私はまず宿を取り、早速念願のカジノへ行ってきたの。んで、気がついたらお財布の中身がスツカラカンだったのよね。あはっ

まあ、カイトにばっか働かせるのも悪いし、そのお金を優しいオーナーサマとしては増やしてあげようって思うじゃない？昨日はカード、一昨日はスロット、一昨日はルーレット……残念ながらもだ大当たりは無いわ。でもね、昨日なんて超惜しかったのよ！今夜こそ負けないわっ！もし負けても、カイト君にもうちよつとがんばって元手を稼いでもらえばいいことだし、気長に楽しむ余裕がなきゃね。所詮この世は、弟のものは姉のもの、姉のものは姉のものという絶対不可侵な真理で成り立っているのだ。

「おし、んじゃ今日も出かけるとしますか！」

私はメイドさんの衣装を脱ぎ捨て、私のお気に入りの、アストレイア王立大学の制服に着替える。うん、やっぱりこの格好が一番動き安いわね！

タンタンと軽やかに階段を降りていくと、私に気付いたマスターが声をかけてきた。

「あら、ティセラちゃん、今日もお出かけ？」

「そうよ。グランティシアに来たのは、部屋に籠るためじゃないもの。」

「毎日大変ねえ。故郷からはるばるグランティシアまでやってきて働きながら行方不明のお母様を探しているんでしょう？まだ若いのに、感心だわ。」

そう、マスターには母親を探しているってことにしてこの宿に置いてもらってるのよね。だって、未成年の女の子が一人で何日も宿に滞在するって、それなりの理由が無いと不自然なんだもの。

「・・・でもね、テイセラちゃん。最近あまりよくない噂を耳にするのよ。若い女の子が、夜、一人で出歩いていると、神隠しにでも遭ったかのように忽然と姿を消してしまうんですって！アタシ、もう怖くて怖くて・・・！」

マスターは心底恐ろしそうに、筋骨隆々とした肩を両手で抱き震え上がっている。マスター、アンタ若くも女でもないだろ。

「大丈夫よ。私、こう見えても結構強いんだから！」

マスターは知らなくて当然だけど、私は魔法王国アストレイアでも屈指の魔法士だ。本気を出せば、普通の男程度なら束になって襲ってきたって余裕で吹っ飛ばすことくらいできる。

「そう？でも、充分気をつけて行くのよ？」

「分かったわ。心配してくれてアリガト、マスター。」

私はぱちつとウインクして、不安がるマスターに背を向ける。そんなことで怖がってるようじゃ、カジノで全財産賭ける事なんてできっこないものね！

さすが不夜城グランティシアというだけあって、夜といえども街は光に溢れ、人々は活動的に行き交っている。私はその人ごみに紛れ、意気揚々とカジノを目指して歩いていた。と言っても、カジノ目指して一直線！ってなわけではない。街にはいろんなお店が立ち並び、目に映る一つ一つが真新しく、見ているだけでも楽しい。私は目に付いたお店にちよこちよこと立ち寄りたりしながら道を進んでいた。こうして見ると、いかにアストレイアが時代遅れか良く分かるわ・・・

「ねーねーテイセ、あそこのお店のパフェ食べてみたいですよ！ウルトラゴージャスデリシャススペシャルスイートパフェですって！とってもおいしいそうですのー！」

・
ファムおぬし精霊体のくせに、んなもん食えるわけが無かるう・・・

「それよかさ、あつちのお店に入って見ましようよ。フォルツァーノの最新ファッションのお店ですって。」

「えー・・・」

私が指したお店は、派手な蛍光色の電色に彩られ、ガラス越しに見えるマネキンに着せられた服はアストレイアでは見たこともない奇抜なデザインのものばかりだった。ファムはよっぽどパフェが食べたかったのか不服そう。でもお財布を握っているのはこの私。選択権も私にあるのだ！

私とファムはそのお店に入り、あれこれ手に取ってみたいしながら店内に飾られた服を見て回った。

「ほら、見て。この服可愛くない？ちよつと試着してみましょ。」

「ちよ・・・ティセ、それ、露出高すぎない??」

「こーいうのがいいのよ。アストレイアのファッションなんて1000年は流行に取り残されてるのよっ!」

私は気に入った服を幾つか選んで、試着室で着替えてみる。まずはこれ。肩と背中が広く露出するようなデザインで、おへそもチラ出し、太腿も露になるほどの短いスカート。ラメが入っていて、動くたびに光に反射してチカチカと光る。うん、これが今風ってやつよねー!

私は鏡に映った自分の姿を見る。自分で言うのもなんだが、なかなか似合っているんじゃない?せっかくだから、ポーズなんか決めてみたり・・・なんてしていると、ふと鏡の中の私が妙に笑った気がした。

・・・え?

私はおかしく思い、鏡に手を突いて、中に映る自分をまじまじと見つめた。何だか、眼に生気が感じられない。これは・・・

私じゃない!!

思った瞬間、鏡の中の私の手が、私を掴んだ!

「きゃ・・・!」

「ティセ!??」

何ていうことだろう！抵抗する間も無く、私の身体は鏡の中の私によって、鏡の中に引きずり込まれてしまったのだ！！

あつたあゝ・・・

私は腕を引つ張られた勢いで、そのままつんのめって転んでしまった。・・・ってか、最近こーいうパターン、多くない・・・？

起き上がって私は辺りを見渡す。私を引つ張った鏡の中の私の姿は見当たらない。鏡の中に連れ込まれたのだから、現実世界と左右逆転になった世界なのかと思いきや、なんだか鏡張りのただっ広い部屋の中に私はいた。ふーん、ってことは誰かが鏡を媒体にした魔術によつて、この部屋とさっきのお店の鏡をリンクさせたってことよね。でもどこの誰が、一体何の目的のために・・・？

その疑問の答えは、私が考えるまでも無かった。だって、相手のほうから現れてくれたんですもの。

「ようこそいらっしやいました・・・アストレイアの王女ティセラ様・・・」

しゃがれたおじーさんのような声に私が振り向くと、目深くロ―ブを被った、いかにも魔法使いといたいでたちの老人がそこにいた。むむ、いつの間に・・・

「・・・あなた一体何者なの！？私をアストレイアの王女と知ってここへ呼んだわけ。何が目的なのかしら？」

正直、あれしきのトラップで拉致られてしまった自分自身への腹立たしさもあつて、私はこの老人にぶちまけるように言った。まあ、それでこの老人が堪えた様子は無かったけど。

「勿論でございます。貴女は普通の人とは異なる魂をお持ちです。一つの器に二つの魂の共有、これは現代の魔法科学の論理を持つてしても解き明かせぬ類のものでございます。」

・・・っ！何このじーさん、何でそんなことまで知ってるのよ！？私とカイトの事は、アストレイア国内でも極々一部の人しか知ら

ない秘密のことなのに！！

「その話、どこで聞いたのよ!?」

私はじーさんに食って掛かる。じーさんは相変わらず平然とした様子で答えた。

「聞かずとも私には何でも分かるのです。この時の鏡を使えば、映し出したものの過去現在未来、全てを見通すことが可能なのです・・・」

じーさんの背後にある巨大な六面鏡は、この薄暗い空間の中で鈍い光を放っている。時の鏡・・・そんなものの存在は初めて聞くけど、どうやらこのじーさん、鏡を媒体にした魔術がお得意のようね。「グランティアに貴女の姿を見たとき、私は歓喜に打ち震えました。貴女のような稀有な魂の所有者であれば、私の永年の悲願が叶えられると・・・」

「悲願・・・?」

「これです。」

じーさんが示す先に、これまた鏡があり、その中には一人の少女が閉じ込められていた。私はそれに近づいてみる。私と同じくらいの年だろう、亜麻色の髪を肩で切りそろえた、どこにでもいそうな女の子。鏡の中で少女はただ眠っているだけのように見える。

「この子は・・・?」

「私の娘です。娘は、研究に身を費やしてばかりで家庭を顧みなかった私をいつも支えてくれていました。優しい娘でした。しかし、流行り病であっけなく逝ってしまったのです。私は嘆き悲しみ、その事実を現実として受け入れることができませんでした。そして私は、娘を蘇生させる為の研究を始めたのです・・・」

・・・まあ、話としてはありがちよね。だけど。

「だから、その研究のために街の女の子を攫ったっていつの?私と同じように鏡の魔術を使って!」

そう、じーさんの娘とやらが閉じ込められた鏡の側の鏡の中に数人の少女が閉じ込められていたのだ!彼女達は生きているのだろう

か？それとも・・・？

「仰るとおりです。娘の魂は鏡の中に封じ込めることに成功しましたが、肉体の劣化を防ぐことはできませんでした。故に、娘の器と成り得る身体が必要だったのです。同じくらいの年頃の少女の身体が・・・しかし、どれも娘の器とは成りえなかつた・・・」

「同情の余地なんて無いわよ。あんた、こんなことが許されるとでも思ってるわけ！？それに、死者の蘇生は禁呪のはず、術者であるあんただってただじゃ済まされないわよ！！」

そう、そうなのよ！！このじーさんがやろうとしていることは禁呪に他ならない。それは人の領域を超えるもの、術者がそれを許されることは決してない。

「私のことはどうでもよいのです。娘さえ、娘さえ蘇ることができるのであれば・・・そのためにテイセラ様、貴女の身体をいただきますぞ！！」

「！！！」

突然、じーさんの体から触手のようなものが伸びて、私の身体を掴んだ！

「な・・・何よこれ！？」

「ククク・・・」

じーさんは不気味に笑う。見る間にじーさんの形相は歪み、体は膨れ上がった。着ていたローブが引き裂かれ、露になったその姿は最早のものではない。ムカデと蜘蛛とイソギンチャクを融合させたような、見るもおぞましい巨大な怪物の姿だった。・・・既に禁呪の影響を受けているんだ・・・！

私はこの怪物から逃れるために、体をよじって触手を振りほどこうとする。が、もがけばもがくほど触手は私の身体をぎゅうぎゅうと締め付けてくる。力で振りほどけないなら、魔法を使っつきゃない！

「風の精霊シルファール、空気の刃となってこいつら引き裂いちゃいなさい！！！」

私は意識を集中させて精霊の棲まう異界との交点を探り出す。その交点を歪ませ、契約した精霊を呼び出すのだ。シルファは陽炎のような姿で現れ、私の言葉通りこの気色悪い触手を薙ぎ払う！

身体の自由を得た私は、次の瞬間その怪物から逃げるために駆け出した。

「・・・無駄なあがきを・・・」

怪物は悠然と私を追ってくる。そら、ここはあの怪物に連れ込まれた、いわばあいつの庭の中にいるようなものだもの。そもそも出口があるかも分からない。それでも私はこの鏡の迷宮を走って走って、ようやくあいつの視界から消えることには成功した。

さすがに息が切れたので、私は壁替わりの鏡に背を預けて呼吸が整うのを待つ。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「それで逃げたおつもりですか？」

「！！！」

私の背後の鏡に、ぬうつと突然ヤツが現れた！！私はぱつと鏡から離れる。そうか、ヤツは鏡の中を自在に移動できるんだ！

鏡の中から怪物が這いずりだしてくる。私は再び走り始めた。息は上がり、足がもつれる。鏡がそこらにある以上、こちらの行動は筒抜けだし、逃げ場なんて無いじゃない！この際だ、こんな鏡全部割ってくれるわあッ！！

「うおらあああああッ！！！」

私はいつも愛用している掌サイズの杖を取り出すと、片っ端から鏡を壊していった。

・・・ぜいぜい。幾つ鏡を壊しただろう。不意に、火照った私の頬にひやりとした風が吹き付けてきた。・・・外だ！出られたんだ！！

意気揚々と私は風の吹いてくる方向へ駆け出・・・つうおつと！なんじゃコリヤア！？危ない危ない、もう少しで落っこちるところだった。そう、外に一步出た瞬間切り立った絶壁の上に立っていたん

だもの。眼下を見下ろすと雲の隙間から黒い森が広がっている様子が見えて、自分が結構な高さにいることがわかる。ここってこうやって見ると塔みたいになってるのね。ちよつとー、手摺りくらい設置しときなさいよ、転落死するじゃないのよ!!

「残念でしたな。貴女に逃げ場は無いのですよ。」

私が立ち止まっていると、追ってきていた怪物が再び背後に現れて言う。

「残念なのはアンタの方ね。私を誰だと思ってるの。アストレイアの天才魔法少女テイセラ様よっ!!」

私は手にした杖を魔力で持って伸ばすと、その上に横乗りする。

そう、外に出れたんだもの。飛んで逃げればいいんじゃないん？ふわりと私は宙に浮く。こんなところ、さっさとオサラバよっ!!

「・・・逃しはしません!!」

怪物の触手がぐんと伸びて私を掴もうとする。

「シルファっ!!」

呼び出した風の精霊シルファールが触手を引き裂くが、数が半端ない。シルファが裂き損ねてしまった一本の触手が、塔の外に飛び立とうとしていた私の足を掴む!

「きゃッ・・・!!」

その触手もシルファが引き裂いてはくれたが、私は空中でバランスを崩して杖から落っこちる!!

「うっそー!!」

私は何とか片手で杖を掴んだけど、だけど・・・!!

・・・山の端が白んで、陽が昇ってくるのが見えた。夜明けだ。

カイトは魔法が全く使えない。今ここで私と入れ替わってしまったら、ただ、重力に従って落ちていくしかない。この高さから。助かるとは思えない・・・私はぎゅっと目を閉じた。

ごめん、カイトっ・・・!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0242d/>

太陽の王子 月の姫

2010年10月9日01時47分発行